

三味線音楽を体験するためのICTを活用した 教育プログラムの開発と実践

Developing and implementing the ICT Programs for playing SHAMISEN

重藤暁* 玉田和恵** 山口敏和** 小原裕二** 松尾由美** 八木徹** 野村泰朗***
Gyo Shigefuji* Kazue Tamada** Toshikazu Yamaguchi** Yuji Obara** Yumi Matsuo** Toru Yagi** Tairo Nomura***

* 常磐津演奏家 / 江戸川大学情報教育研究所 ** 江戸川大学 情報文化学科 / 情報教育研究所

*** 埼玉大学教育学部 / 江戸川大学情報教育研究所

*Japanese traditional music “Tokiwazu” player/Edogawa Institute of Information Education

**Edogawa University/Edogawa Institute of Information Education

***Saitama University/STEM Education Research Center

近年、日本の小・中学校の音楽の授業では三味線などの「日本の伝統音楽」の指導が求められている。また同時にGIGAスクール構想によって授業でICTを活用することも求められている。しかし「日本の伝統音楽」の指導は十分におこなわれておらず、ICTを活用した指導も十分におこなわれていない。そのため、本研究では三味線音楽を体験するためにICTを活用した三味線音楽に親しむための教育プログラムを開発し、中学校で実践して効果を検証した。この教材が日本全国の小・中学校で活用されることを目指し、学校現場での「日本の伝統音楽」の普及とICT活用の促進に寄与したい。

キーワード：日本の伝統音楽 三味線音楽 我が国の音楽 ICT活用 プログラミング教材

1. はじめに

現在、学校教育では子ども達に伝統芸能に関する活動を体験させることが求められている。例えば1981年4月に施行された学習指導要領では、中学校の音楽の授業内で長唄の「勸進帳」という曲を鑑賞することが示されている(文部省 1977)。ただ当時の授業も効果的な指導が行われておらず、「三味線音楽などを聴かせると、生徒はクスクス笑い出す」という当時の授業の記録が残っている。また指導者が十分に理解しないままに、生徒に「勸進帳」を鑑賞させるだけという状況もあった。そのため「教師自身が、楽曲の感動するところを味わいつくしておく」ことが指導には必要であるとされていた(高月 1982)。

1998年改訂の学習指導要領から、中学校の授業にて和楽器を1種類以上用いることが求められるようになり、三味線をはじめとした和楽器を指導することが教員に求められるようになった。しかし自信をもって日本の伝統芸能の音

楽を演奏できる教員が少なく、日本の伝統音楽に関する学習成果があまり上げられない状況であった。当時の教育現場について「日本の伝統音楽についての慢性低調病には一度活を入れる必要がある」と当時から言及されている(松本 1998)。

少なくとも40年以上前から音楽の授業で日本の伝統音楽を取り扱うことに対して、現場の教員が対応できていない。

そのような状況の中で、文部科学省は2018年から、我が国の音楽文化に親しみ、自ら表現、創作したり、鑑賞したりすることを求めるようになった(文部科学省 2018)。

これまで三味線音楽をはじめとした「我が国の音楽」の授業をおこなう際、教員は、我が国の音楽の指導をする際の音源や楽譜等の示し方、伴奏の仕方、曲に合った歌い方や楽器の演奏の仕方を指導することが求められるようになった。しかし教員養成過程で西洋音楽を専門として履修した音楽の担当教員にとっては、このような指導は難しい。これに加えて、現在は「我が国の音楽」を生徒みずから表現、創作するよう促すことも教員に求められるようになった。

小・中学校の音楽科で、どのような邦楽教育がおこなわれているか調査したところ、ただDVDなどで動画を授業で見せるだけの授業が多かった(重藤 2022)。また、GIGA スクール構想も実現し、小・中学校ではICTを活用した学習の充実が求められている。音楽の授業も例外ではない。小学校の音楽の授業ではICT 端末を利用して、我が国の音楽の旋律や音階などの特徴に気付くとともに、即興的に音を選択したり組み合わせたりして表現する技能を身に付けながら表現することを通して、音楽づくりの発想を得ることができるようにすることが求められている(文部科学省 2021)。

子ども達が我が国の音楽文化に親しみ、自ら表現、創作したり、鑑賞するために、またICT 端末を用いて即興的に音を選択したり組み合わせたりして表現する技能を身に付けながら表現するための教材が、いま学校現場で求められている。「我が国の音楽」の指導とICTを活用した指導の両方のニーズを満たすために、ICTを活用した三味線音楽のための教育プログラムを開発した(重藤 2023)。

しかし、三味線音楽のための教育プログラムを実際に活用した教員から「日本の伝統音楽に親しみがないため、演奏の上手下手がわからない。どのように指導したらよいかわからない」といった意見が寄せられた。

本研究では、2023年に開発した教育プログラムの指導案を改良した。GIGA スクール構想で配布された端末を用いて中学生がより能動的に三味線音楽学習に取り組めるかどうか、中学校で授業を実践し、効果を検証した。

2. 開発した教育プログラムと改良した指導案

日本の伝統音楽である三味線は長い年月継承されることで、今日まで残り続けた。継承の過程で、入門者は師匠や先輩の演奏を耳で聞いて真似することがもとめられる。そして師匠や先輩と演奏を何度も聞き真似することで、独特の発声方法や節回しといった発声の抑揚などを身につける。この継承方法によって、「邦楽らしさ」といったものがつくられていった。2023年に開発した教育プログラムは、「擬似的な継承過程」を子ども達に体感させることを目的として開発された。

歌舞伎座などでの演奏でも実際に使用される詞章や抑揚の付け方などの記号が書かれて継承されてきた床本(写真1)を子ども達に提示する。そして三味線の音源を生徒のICT 端末に配布する。生徒に床本に書き込まれた記号を読み解かせ、また詞章の意味を読み解かせ、自分たちでどのように三味線音楽に合わせて詞章を語ればよいのかを思考させる。その後、生徒はひとりで実際の三味線音楽に合わせて声を出し、読みといた成果を発表する。その発表の際に、生徒には「とにかく大きな声で発表すること」を意識させた。このプログラムは、どれくらい積極的に授業に参加しているか、どれくらい大きな声で表現しているかという観点で教員に評価してもらうこととした。以前の実践では、

生徒は、継承されてきた床本を積極的に読み解いていったが、三味線音楽に合わせて発表するときには声が小さく、うつむきがちで、うまく詞章を語ることができなかった。また、積極的に人前で発表する生徒も少なかった。この原因は、子ども達が三味線音楽のメロディーに合わせて声を出すことに慣れていなかったからだと考えられる。

今回はこの問題点を解決するために、授業展開を変更した。ひとりで床本を解読して発表するのではなく、複数人のチームをつくって床本を解読させ発表するようにした。発表する際、必ずチーム全員で語りを揃えることを課した。チーム全員で語りを揃えるために、生徒には三味線音楽の決まりごとや西洋音楽との違いを議論することが自然と求められる、チームのため気後れすることなく声を出すことができるようになる。

生徒が議論と発表を通して、三味線音楽の独特の約束事や語ることの楽しさを体感させることを目指した。

このプログラムには、事前学習の必要がない。どれくらい積極的に議論に参加しているか、という観点のみで教員には生徒を評価してもらうこととした。

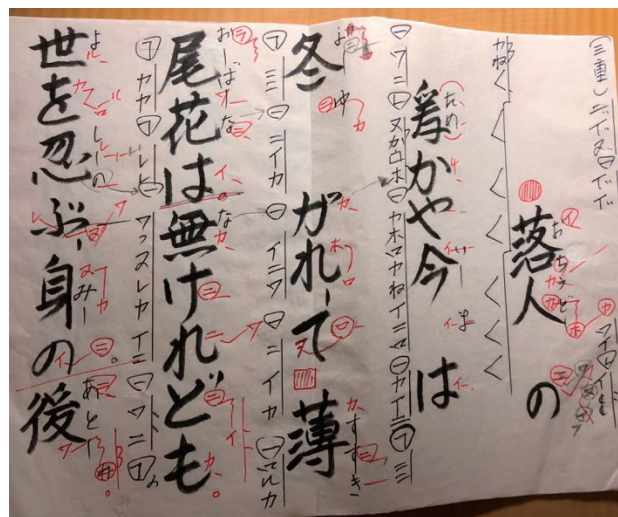


写真1 継承された床本の一例

3. 実施方法

本研究では、埼玉県坂戸市立千代田中学校で実践を行った。

3.1 概要

- ・実施日時 10月11日(水)
- ・5・6時間目(13:00～15:00)
- ・対象 第二学年(75名)
- ・実施場所 千代田中学校 多目的室
- ・邦楽演奏協力者 岸澤満佐志氏

授業の流れは、表1の通りである。

区分	学習活動と内容	指導上の留意点・支援・評価
10分	1. 課題の把握 三味線の説明・常磐津の説明 日本の伝統楽器である三味線の構造や、三味線に使われている材料の説明を行う。 三味線音楽のひとつのジャンル常磐津について、成立した時期や場所、流行した時期など歴史的な観点を説明する。	
10分	2. 継承してみよう(1人) 生徒に「式三番叟」の床本とカラオケを配布する。 まずは1人で床本とカラオケをヒントに、自分なりの「式三番叟」を語ってみる。	○実際に使用している床本のコピーを持参いたします。配布をお願いいたします。 ○マイクなどの音響のご準備をお願いいたします。 ○事前に生徒の端末に三味線のカラオケをダウンロードしておいていただきたいです。
10分	3. 継承してみよう(3人) 3人ほどのグループに分かれる。 3人で揃えることを目的に3人組で意見を合意して、3人で揃うように「式三番叟」を語ってみる。	○上手い下手ではなく、3人でぴったり揃えることを目指すようにご指導お願いいたします。
10分	4. 継承してみよう(6人) 6人ほどのグループに分かれる。 6人でぴったり揃えることを目的に6人組で意見を合意して、6人で揃うように「式三番叟」を語ってみる。	○上手い下手ではなく、6人でぴったり揃えることを目指すようにご指導お願いいたします。
10分	5. 継承してみよう(12人) 12人ほどのグループに分かれる。 12人でぴったり揃えることを目的に12人組で意見を合意して、12人で揃うように「式三番叟」を語ってみる。	○上手い下手ではなく、12人でぴったり揃えることを目指すようにご指導お願いいたします。
10分	5. 数班前を指名して、前に出て発表をする。 その際、カラオケ音源ではなく、実際の三味線に合わせてみる。	○前に出て発表するグループを先生方に指名していただきたいと思います
10分	5. 実際の「式三番叟」を聞いてみる 実際の「式三番叟」を聞くことで、生徒が想像した「式三番叟」との違いを体感する。 アンケートをつかって、効果測定をする。	

表1 指導の流れ

3.2 授業の様子

授業の冒頭で、日本の伝統楽器である三味線の構造や、三味線に使われている材料の説明をおこなった。また今回の授業で扱う常磐津の歴史について解説した。生徒には、プロによるデモ演奏は見せなかった。プロのデモ演奏を生徒に見せないことで、生徒に自由に床本の解釈をさせた。

その後、生徒に、今回の課題曲である「式三番叟」の床本を配布した。事前に児童のICT端末にダウンロードされた三味線のスクラッチ用カラオケ音源を立ち上げさせた。

まず10分間時間をとって1人で床本に書き残された記号などを頼りに、「式三番叟」をどのように語るのか解説させる。生徒は床本を解説しながら、実際の三味線のスクラッチ用カラオケ音源を再生させて、自分なりの「式三番叟」を語った。

次に、3人組を作り床本に書き残された記号などを頼りに、「式三番叟」をどのように語るのか解説させた。その際3人がしっかり声を揃えて語れることが目的であることを明示した。3人で話し合い、意見を一致させて、3人でしっかりと揃うように「式三番叟」を語ってみよう教員は指

導する。

その後6人組をつくり同様のグループワークをおこない、最後に12人組をつくらせて同様のグループワークをおこなった。全員で揃って語れるよう指導した。

千代田中学校は以前から授業で積極的にグループワークをおこなっていることから、グループでの議論は活発に行われ、ほぼ全員の生徒が積極的に取り組んでいた。またICT端末の使い方にも慣れており、スクラッチ用カラオケ音源を再生できない生徒もいなかった。

グループワーク中に、プロの演奏家や教員が巡回して、声がけをおこなった。この声がけではプロの演奏家は生徒にヒントや正解などを与えないように気をつけた。これは生徒が自由に床本を読解させるためである。プロの演奏家や教員は生徒に対して、「グループ全員が一言一句揃えて語ること目的としている」と繰り返しアナウンスした。三味線の拍からズレてしまったとしても、音程が外れたとしても全員揃っていたら構わないということを生徒に伝えた。これは若手の演奏家が師匠や先輩から指導を受けるとき、



写真2 授業冒頭の三味線の説明



写真3 一人で床本を解読して一人で語る

最初に指導されることと同様である。今回は、擬似的な継承過程を体験させるプログラムであることから、しっかりと揃えて大きな声で表現することを目的としたからだ。生徒にもこの目的を繰り返し伝えた。

グループワークが終了したところで、グループごとに教室の前で発表させた。生徒はグループ全員で語りを揃えるように意識をしながら、積極的に声を出して発表した。

授業の最後にプロの演奏家が「式三番叟」を披露した。その後生徒に無記名のアンケートを実施した。

3.3 学習指導要領での記載内容

原稿の中学音楽の学習指導要領では、第2学年及び第3学年 A表現(2)器楽 で日本の伝統音楽も扱われることになっており、以下のように記載されている。

ア 器楽表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲にふさわしい器楽表現を創意工夫すること。



写真4 ICT端末を活用しながらグループワーク



写真5 プロの演者が巡回する

イ 次の(ア)及び(イ)について理解すること。
(ア)曲想と音楽の構造との関わり

3.4 調査内容

生徒に以下のアンケート用紙(図1)を配布し、記入を求めた。

アンケート

今日の感想を教えてください。ご協力よろしくお願いいたします。

問1：今まで三味線を見たことがありますか？

はじめて見た テレビや動画で見た 目の前で見たことがある

問2：今まで三味線をえんそうしたことがありますか？

ある ない

問3：歌舞伎を知っていますか？

知っている 知らない

問4：今回の感想を教えてください

面白かった 普通 よくわからなかった

問5：これから三味線を見たり聞いたりしたいですか？

はい いいえ

問6：これから三味線を自分でやってみたいですか？

はい いいえ

問7：何人で作業した時が一番うまくできたと思いますか？

3名 6名 12名

問8：うまくできたと感じたのはどの点ですか？

リズム 共同性 抑揚 言葉 その他（ ）

問9：何人で作業した時が一番難しいと感じましたか？

3名 6名 12名

問10：難しいと感じたのはどの点ですか？

リズム 共同性 抑揚 言葉 その他（ ）

問11：授業の長さについて

ちょうど良い まあ良い 普通 少し長い 少し短い その他（ ）

図1 配布したアンケート

調査内容は表2の通りである。

表2 調査項目

設問1	今まで三味線を見たことがあるか
設問2	今まで三味線を演奏したことがあるか
設問3	三味線音楽が用いられている日本の代表的な伝統芸能である歌舞伎を見たことがあるか
設問4	今回の授業の評価
設問5	今後三味線を鑑賞したくなったか
設問6	今後三味線を演奏したくなったか
設問7	何人でグループワークをした時がうまくいったように感じたか
設問8	今回の授業を通して表現できたと感じたところ(複数回答可)
設問9	何人でグループワークをした時がうまくいかなかったかと感じたか
設問10	今回の授業を通して表現することが難しいと感じたところ(複数回答可)
設問11	授業時間の長さについて

4. 実践結果

4.1 今まで三味線をみたことがあるか

7割以上の生徒は、小学校と中学校の音楽の授業で三味線の演奏を鑑賞する機会があったようである(図2)。三味線を見たことがないと回答した生徒は箏や太鼓を鑑賞したようである。

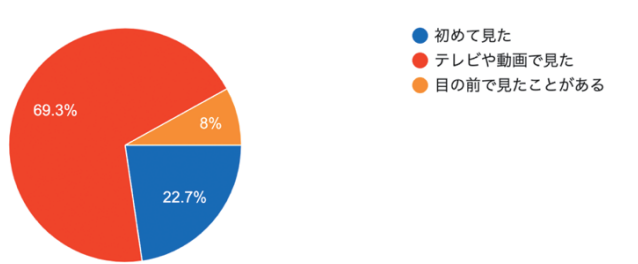


図2 今まで三味線を見たことがあるか

4.2 今まで三味線を演奏したことがあるか

今日まで「我が国の音楽」についての授業は、鑑賞がメインでおこなわれてきたため、三味線を実際に手にしたことがある生徒は2名のみで、全体の3%弱ほどであった(図3)。これまでに実施した小学校の調査でも実際に三味線を演奏したことがある児童は5%ほどであったことから、地域差には関係なく、ほとんど三味線を演奏した生徒がいないことがわかった。

三味線は皮が破れやすく、常にメンテナンスが必要で扱いづらい楽器である。そのため学校の音楽室に設置されていることが少なく触れる機会は極端に少ない状況である(重藤 2023)。

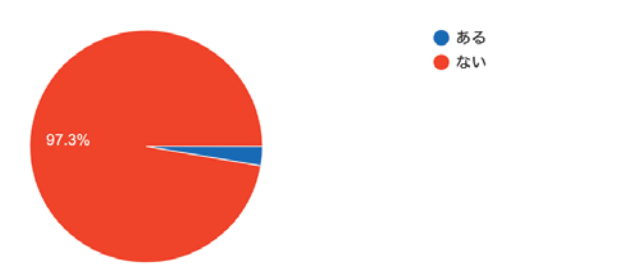


図3 今まで三味線を演奏したことがあるか

4.3 歌舞伎を知っているか

三味線音楽は、日本の代表的な伝統芸能の歌舞伎とともに発展しており、歌舞伎とは密接に関わっている。前回小学生に対して歌舞伎について質問してみると、80%以上の児童が歌舞伎を知っていた。中学生にも調査してみたところ90%以上の生徒が歌舞伎を知っていた。歌舞伎映像は音楽や国語の授業で鑑賞することがあるようで、歌舞伎の

認知度は高いことがわかった(図4)。

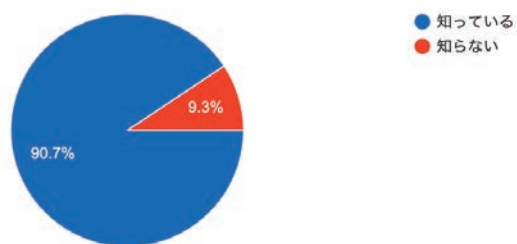


図4 歌舞伎を知っているか

4.4 授業の感想

「面白かった」と回答する生徒は95%であった。生徒は楽しんで「擬似的な継承過程を体験する」プログラムに取り組めたようである。「継承とは何か?」や「常磐津とは何か?」という説明をおこなわなくても、生徒は三味線音楽を楽しみ、能動的に授業に参加したようである。また各グループの発表からも、今回の授業を楽しんだ様子がうかがえた(図5)。

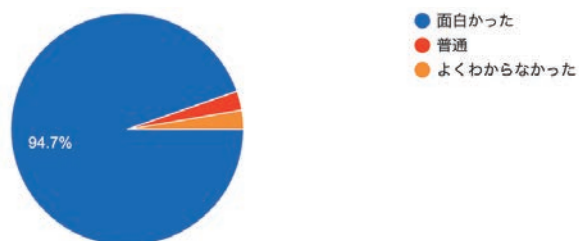


図5 今回の授業の感想

4.5 今後三味線音楽を鑑賞したいか

90%を超える生徒が、また三味線音楽を鑑賞したと回答した(図6)。

この教材を通して、今後、三味線音楽を鑑賞したいという生徒の意欲を喚起することができたようである。

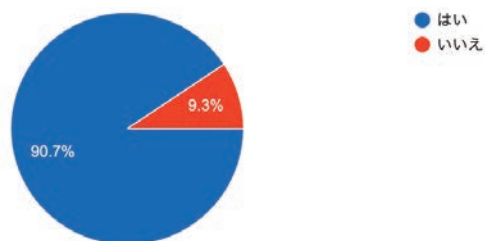


図6 今後三味線音楽を鑑賞したいか

4.6 今後三味線音楽を演奏してみたいか

今後、三味線を演奏してみたいかとの問いでは、半数の生徒が演奏したいと答えた。この教材の最終的な目的は、

三味線音楽を実際に聴いてみたい・弾いてみたいという生徒の意欲を喚起させることである。弾きたくはないと回答した生徒が一定数いることから、今後何らかの工夫をする必要があることがわかった(図7)

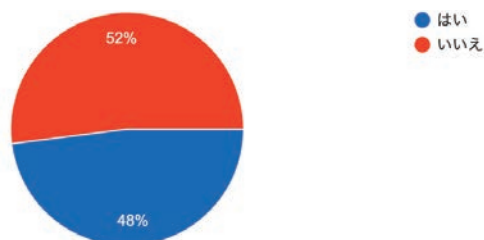


図7 今後三味線を演奏したくなかったか

4.7 何人でグループワークをした時がうまくいったように感じたか

今回過半数を超える生徒が6人でグループワークをおこなった時が一番うまくいったと感じたようである。巡回した教員も「6人の時が一番議論が盛り上がっていた」と感じていた。3人ではお互いが遠慮してしまい本格的な議論ができなかったようである。12人では意見がまとまらず議論に参加しない生徒もいた。また無回答の生徒が4人いたが、1人で考えた時が一番うまくいったとのことであった。(図8)。

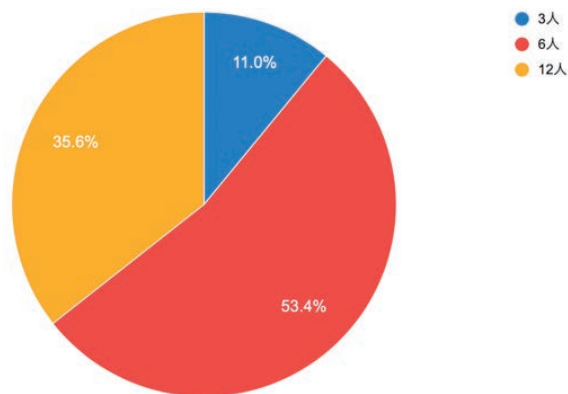


図8 何人でグループワークをした時がうまくいったように感じたか

4.8 今回の授業を通して表現できたと感じたところ(複数回答可)

今回の授業で生徒は三味線独特のリズムを意識しながら、グループ全体で一つの語りを表現しようと試みていたことがわかった。一方節回しに不可欠な抑揚などがうまく表現できたと感じた生徒は少なかった。授業の冒頭にデモ演奏などをしなかったことから、抑揚や日本の伝統芸能独特の発声まで生徒は気づくことができなかったと思われる(図9)

上手くできたと感じたのはどの点ですか？
73件の回答

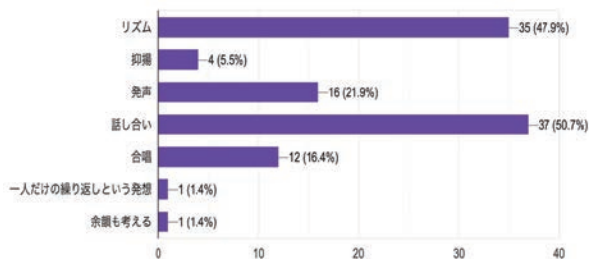


図9 今回の授業を通して表現できたところ

4.9 何人でグループワークをした時がうまくいかなかったかと感じたか

4.7での結果と同様である。3人でのグループワークが難しかったようである(図10)。

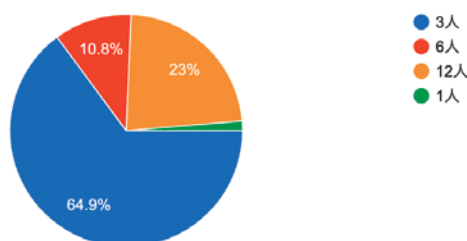


図10 何人で作業したときがうまくいかなかったように感じたか

4.10 今回の授業を通して表現することが難しいと感じたところ(複数回答可)

生徒は日本の伝統的な音楽特有のリズムを表現することが難しいと感じたようである。しかし4.8の結果も踏まえると、独特のリズムで表現することは難しかったがグループワークをおこない議論をすることで、表現することができるようになったと考えられる。今回のプログラミング教

難しいと感じたのはどの点ですか？
74件の回答

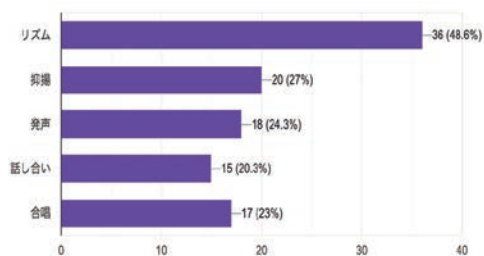


図11 今回の授業で難しいと感じたこと

材によって、生徒は三味線音楽特有のリズムを体感することができたようである(図11)。

4.11 授業時間の長さについて

床本の読解や、生徒通しの議論、グループ全員でしっかりと語りを揃えるための練習などに使える時間はトータル40分以上あった。そのことから生徒は十分に取り組むことができたと考えられる(図12)。

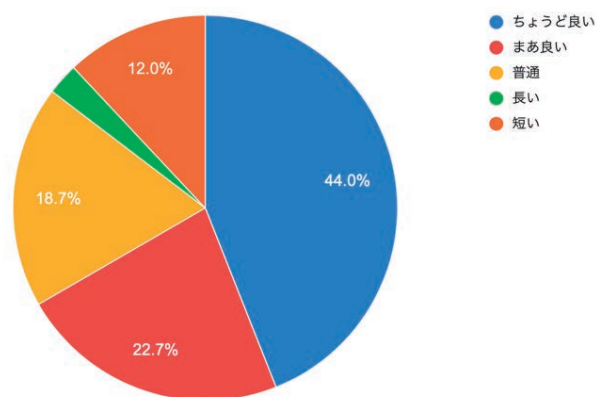


図12 授業の長さについて

5. まとめと今後の課題

本研究では、昨年開発した三味線音楽のプログラミング教材の指導案を改良した。生徒の事後調査結果が概ね良好であったことから、現在学校現場で求められている「我が国の音楽」の指導とICTを活用した指導の両方のニーズに応えることができる教材となる可能性が示唆された。本教材を活用することによって、生徒が積極的に「我が国の音楽」に取り組むことができる授業が可能となる。授業冒頭で「三味線音楽のリズムとはなにか」や「三味線音楽独特のメロディーとはなにか」というレクチャーをしなかったことで、生徒は自由に議論をすることで三味線音楽の表現を積極的に考えていた。鑑賞メインの授業ではこのようなことを考えさせることは困難である。

また「日本の伝統芸能の音楽に親しみがないため、演奏の上手い下手がわからない。どのように指導をしたらよいかわからない」という教員側の問題について、担当教員から「三味線音楽の構造を自然と体感することができるので、生徒が主体的に学習に取り組んでいる様子がみられた」との感想が寄せられた。担当教員もグループワークに積極的に参加するように促すことで授業が進んでいくので、事前準備もいらず、これまでのグループワークでの評価と同様に生徒の「主体的に学習に取り組む態度」を評価すればよいこととなる。

三味線音楽には西洋音楽とは異なるリズムとメロディーがある。それをただ鑑賞しただけでは十分に理解することができない。今回の教材での実践で生徒は「擬似的な継承

過程」を体感することができたと考えられる。

「三味線音楽らしさ」を言語化することはできないが、たしかに生徒の語りから、「三味線音楽らしさ」を感じることができた。生徒は「グループ全員が一言一句揃えて語れる」ことを目指して、三味線音楽のリズムや節回しを繰り返し議論する。その際、全員にとって語りやすいリズムや節回しを見つけ出し習得していった。何度も繰り返すことで全員にとって語りやすいリズムや節回しが確固たるものになっていく。生徒が三味線音楽独特のリズムや節回しを獲得していく過程は、プロの演奏家が何百年にもわたって継承を続けてきた過程と同様なのではないだろうか。

授業の最初にプロの演奏家や教員が節回しなど三味線音楽独特の表現方法などをレクチャーしなくても、生徒は積極的に議論する過程で三味線音楽独特のリズムや節回しを自然に獲得していく。これこそが、三味線音楽の継承の本質であり、「三味線音楽らしさ」であり、今回取り扱った三味線音楽のジャンルのひとつである「常磐津らしさ」だったと考えられる。

今後は、本教材の普及を考えるとともに、本教材で学んだ生徒が「今度は実際の三味線を触ってみたい」という意識を持つようになるよう改善をする必要がある。また、三味線音源を活用したプログラミング的思考を育成することができる教材の開発も目指す予定である。

謝辞

本研究は、京都市「伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス」令和3年度「伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム」の助成をうけたものである。ここに記して感謝す

る次第である。

参考文献

- 教育出版株式会社(2016)「まなびリンク(中学校)」
中学音楽・楽器 音楽のおくりもの 中学音楽 音楽のおくりもの 2・3 下 <https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/ml-jh/ongaku/23g.html#6-4>(参照日 2024 .1. 25)
- 文部省(1977) 中学校学習指導要領(昭和56年4月施行)
- 文部科学省(2018) 小学校学習指導要領(平成29年告示)
- 文部科学省(2021) 教育の情報化の推進教員のICT活用指導力の向上 事例「小学校・第4学年 音楽科「日本の音階で旋律をつくろう」」https://www.mext.go.jp/content/20210609-mxt_kyoiku01-000015485_js1.pdf (参照日 2023,1,25)
- 松本(1998) 表現教材として歌舞伎『勸進帳』,日本教材学会,日本教材学会会報,9(36),13-16
- 重藤(2022) 重藤暁・玉田和恵・山口敏和・小原裕二・松尾由美・八木徹「邦楽を全ての子どもに体験させる手段としてのICTの可能性—三味線音楽のプログラミング教材開発に向けて—」江戸川大学情報教育研究所 Informatio, 19, 83-88
- 重藤(2023) 重藤暁・玉田和恵・山口敏和・小原裕二・松尾由美・八木徹・野村泰朗「ICTを活用した三味線音楽の体験機会の創出のためのプログラミング教材の開発」江戸川大学情報教育研究所 Informatio, 20, 79-86
- 高月(1982) 生徒の興味・関心を高めるための鑑賞指導の在り方—長唄「勸進帳」を中心に,愛媛県総合教育センター教育研究紀要, 47, 17-19